

新発掘資料から見たゾルゲ事件の実相

早稲田大学客員教授 加藤哲郎

司会（日露歴史研究センター代表 白井久也）
皆さん、定刻（午後3時）になりましたので、これからゾルゲ事件勉強会を始めます。

本日、研究報告をされるのは一橋大学名誉教授で、現在は早稲田大学客員教授の加藤哲郎先生です。先生には昨年、1昨年とこの勉強会で続けて2回、研究報告の発表をお願いしており、今回は3回目になります。きょうの講演テーマは、「新発掘資料から見たゾルゲ事件の実相」です。先生はこの夏、米国、英国、ドイツと3ヵ国にお出掛けになって、各地の公文書館でいろいろな資料収集をして帰国されました。その中に、皆様のお手元にすでにお配りしてある、本日の講演レジュメにもありますように、ゾルゲ事件関連の様々な資料を現地でコピーして、持ち帰られました。ざっとご覧になればお分かりいただけるかと思いますが、どれも日本では入手が困難な本邦初の貴重な資料ばかりです。本日は、必ずやわれわれが知らない、興味あるお話が聞けるものと期待しております。

この会場の使用期限はこれから午後5時までです。最初に先生の研究報告を1時間ほど聞いて、残りの30分を質疑応答の時間に当てようと思っております。それでは、加藤先生、よろしく願いいたします。

加藤哲郎（早稲田大学客員教授）今年夏の調査の主たる目的の1つは、米国で日本の占領期の日本政治に関する資料を収集することでした。もう1つは、これとはまったく別のプロジェクトで、9月に日本で国際ペンクラブの大会が開かれたのを機に、文学史研究の皆さんと始めた創立期日本ペンクラブ研究に必要な資料を、欧州に行き探してきました。いろいろな公文書館を回ってきたので、そのときついでに、米国、英国、ドイツでゾルゲ関連の資料にも当たってきました。

2010年4月26日、東京の在日ロシア大使館で、ゾルゲ事件についての「日ロ・シンポジウム」が開かれました。このときの会議記録は、日露歴史研究センターが発行している『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』No.26に収録されています。私は、この



ゾルゲ・尾崎墓参会後の勉強会で研究報告を発表する加藤哲郎氏。今回は26人参加。

シンポジウムで、「ゾルゲ事件の3つの物語—日本、米国、旧ソ連」と題して、ゾルゲ事件については日本、米国、旧ソ連の3つの見方がある。そこでは主人公も焦点となる時期も国によって違っているという指摘をしました。今日は、これに英国、ドイツ、中国を加えると、また違った見方ができるという話になります。

米国ではFBI、CIA、MISが資料を保管

これまで白井さんや渡部富哉さん（社会運動資料センター代表）に、私が収集してきた資料を、いくつか提供してきました。その延長で、まずはワシントンDCの米国国立公文書館（NARA）に、第2次世界大戦から戦後についての連邦警察（FBI）、中央情報局（CIA）、陸軍情報部（MIS）のファイルがあって、さまざまなゾルゲ事件関係資料が保管されています。昨年まで見て紹介したのは、尾崎秀実、宮西義雄、木元伝一、川合貞吉、豊田礼助、中西功らについてのMISファイルです。今年は、秋山幸治と田口右源太のファイルを見つけてきまし

た。

これらの中で最も重要なのは、日本ではほとんど知られていませんが、豊田礼助（別名矢野、武田）のファイルです。宮城与徳がロサンゼルスで活動していた時期の米国共産党日本人部の指導者です。しかし、彼のファイルは、一昨年もそうでしたが、米国の国家機密のため、1ページの非公開通知が入っているのみでした。

今回、陸軍情報部（MIS）資料から見つけた秋山幸治と田口右源太の個人ファイルは、昨年ここで報告した川合貞吉ファイル、すなわち川合が戦後、連合軍最高司令官総司令部（GHQ）の諜報機関 G-2 のウィロビー少将から毎月2万円もらって、ゾルゲ事件の情報を提供していたという証拠書類に比べれば、それほど劇的なものではありませんが、それなりに歴史的な意味があると思います。

戦後も監視された田口右源太と秋山幸治

まず、田口右源太ですが、彼は宮城与徳と連絡をとり、旧日本共産党関係者や左翼の情報をゾルゲ諜報団に伝えたとして、13年の刑を受けて服役、45年10月にマッカーサーの政治犯釈放令によって釈放されます。秋山幸治も釈放されますが、2人とも今度は特高警察ではなくて、米陸軍情報部によって監視が続けられることになったのです。

田口の場合は、釈放後、北海道で活動を行ないます。帯広や十勝で一時は共産党の地区委員長をやりました。帯広の生協運動に関わっていたのですが、GHQ がゾルゲ事件の再調査をすることになり、米国は日本側が戦前行なった捜査の後追いを46年から始めるのですが、それから50年代まで、田口が監視されていた記録があります。

それによりますと、田口は、ゾルゲ事件当時は評論家矢部周という人物から情報を取っていたと注意書きされています。1933年から41年にかけて、国際共産党（コミンテルン）の対日情報機関員であったと断定されています。「こういう人物であるから注意せよ」と米国MISから上がってくる情報が、ワシントンのNARAに保管されています。

例えば1953年1月21日付で、「帯広からどこかに転居したようだが、転居先を教えよ」と指令が出ています。日本はサンフランシスコ講和条約に調印して独立しますが、独立後も日本に駐留している米軍基地の中には、対敵諜報部隊（CIC）が残って、共産主義者等を監視していました。現在でも基地がありますから、沖縄で反戦・平和運動をやっている人たちは、みんなこの監視の対象でした。田口はゾルゲ事件元被告として監視されましたが、戦後はソ連の諜報員ではなかったと判定されたようです。監視の結果として、田口は「クラスB コミュニスト」

に仕分けされています。これが、米側の追跡調査の結論になっています。

もう1人は、フランク・コウジ・アキヤマ（秋山幸治）です。彼は宮城与徳が集めてきた情報を英語に翻訳して、宮城がそれをゾルゲに渡し、ゾルゲがモスクワに送っていました。秋山は立教大学を出てロサンゼルスへ行き、商社で働き、このとき宮城と知り合いました。それが縁となって、帰国後、来日した宮城から英語力を買われ、英語の翻訳を引き受けるようになりました。秋山はこのためゾルゲ事件に連座して、懲役7年の刑を受け、45年9月に釈放されました。秋山の判決文は、みすず書房が刊行した現代史資料『ゾルゲ事件』（全4巻）の第3巻に載っています。その秋山は、戦後どうなったのか？

秋山については、「事情を知り、宮城与徳が提供した資料を英訳した人物である」として、釈放後も経歴が調べられました。MISが見出したのは、秋山は戦後、ゾルゲ事件の被告であった経歴を隠して、米軍相手のキャバレーでボーイみたいな仕事をしていました。48年からはGHQの事務員に採用されて、月給3000円を支給されていました。MISは、この事実を掴んで、秋山を監視し交友関係を追っていたことが、秋山ファイルに記録として残っています。

秋山が獄中で知り合った1人に、ソ連帰りの演劇人土方与志（注 演出家。築地小劇場の創立者の1人）がいました。土方とは戦後も付き合いがあったと記録されています。秋山は戦後、川合貞吉とも会っていました。また、秋山ファイルには、米国側は名前まで掴んでいませんが、ゾルゲ事件で秋山以外にももう1人翻訳に従事していた女性がいた、と注記されています。それは、のちに渡部富哉さんが名前を割り出すのですが、警視庁外事課に勤務していた鈴木邦子という女性です。さらに、米国帰りの秋山は、宮城だけではなく、北林トモともつながっていたと出てきます。

秋山と高山（薄田研二）の仲介者の土方与志

さっき申し上げた、秋山が獄中で知り合った土方与志は、ソ連のスターリン粛清で国外追放になった演出家で、ゾルゲ事件に直接関係はないのですが、秋山は、土方を通じて、戦後も左翼とつながっていると報告されています。最も緊密な友人は、本名高山徳右衛門という人物です。新劇の俳優で、芸名を薄田研二と言って、戦後の新劇運動で活躍した人です。映画でもよく悪役で出ていたので、ご存知の方も多いかと思います。GHQに勤めている秋山が、薄田研二こと高山とつながっていて、日本共産党、場合によっては共産党を通じてソ連共産党とつながる可能性があることが、調査されていたのです。

同時に、彼の交際範囲の中には、日本共産党の柄沢トシ子や川崎巳三郎らの名前も入っています。1950年7月27日には、米国のFBIから日本のGHQに対して、「ゾルゲ・リンク」つまりゾルゲ諜報団は、「活動資金を米国経由で日本に運んでいたのでないのか。その際、この秋山幸治が何らかの役割を果たしていたのではないのか」という問い合わせがありました。しかし、その証拠は見つからなかったと、秋山ファイルにあります。

ちなみに、今日もご出席の武田大典さんただだい字けも、戦前の米国共産党と関係がありましたから、FBIの監



尾崎秀実・英子の墓前で、生前の尾崎秀実の思い出を語る武田大典さん。毎年、ゾルゲ・尾崎の墓参を欠かさない。11月20日、98歳の誕生日を迎える。

視の対象になりうる人物と言えますが、このリストには載っていませんでしたから、ご安心ください。

(笑い)ただし、秋山は、自分が戦後もずっと米国側から監視されていることを、おそらく最後まで自覚していなかったでしょう。しかし米軍は、彼のGHQ勤務の同僚(日本人)や上司(アメリカ人)に彼の思想態度や交友関係を聞き出して、その尋問記録が綴じ込まれています。

2500名分の日本人名ファイルの内訳

去年も申し上げましたが、日本人名の陸軍情報部MISファイルは、無名の人々が圧倒的で、約2500人にのぼります。このうちゾルゲ事件関係者は、今回報告した秋山、田口を含め10人近くになります。ただし、ゾルゲ事件関係者でありながら、ゾルゲ事件の関係では全然名前が出てこない人もあります。

それは例えば、堀江邑一むらいちです。堀江は、渡部さんの研究によれば、ゾルゲ事件で非常に重要な役割を果たした人物の1人です。彼は、尾崎秀実の親友で、「満鉄調査部事件」(注 関東軍憲兵隊司令部が南満州鉄道＝満鉄＝調査部関係の学者、研究者らの思

想弾圧を狙った事件、1942年の第1次検挙で31人、1943年の第2次検挙で44人が逮捕された。このうち、21人が満州国治安維持法違反で起訴され、1945年5月に2人が懲役5年、ほか全員が執行猶予つき有罪判決を受けた)とか「昭和研究会」(注 1933-40年、後藤隆之助によって組織された近衛文麿のブレイン・トラスト、尾崎秀実も重要なメンバーの1人)、「昭和塾」(注 平貞蔵ら昭和研究会の有力メンバーが作った青年教育機関)にも関わりましたから、徹底的に再調査や再尋問が行われれば、ゾルゲ事件と結びついた可能性があるのですが、MISの堀江ファイルは、そこには注目していません。

堀江は戦後、日本共産党の参議院議員になります。日ソ協会副会長になって、その関係で調べられているものの、尾崎やゾルゲ事件のつながりでは、GHQによる追及の対象外でした。堀江はこの件では調べられなかったことが分かります。中西功の個人ファイルも、戦後の議員活動の監視が大半です。

こういう風に、周辺資料も調べていけば、いくらでも面白い資料があります。日本共産党関係では、今回は、徳田球一の分厚いファイル、神山茂夫や志田重男の個人ファイルをコピーしてきました。ただし、宮本顕治や伊藤律のファイルはありませんでした。昨年作家の小林多喜二ファイルもあると報告したのですが、今回請求して読んでみると、「小林武二」という別人でした。実際の調査は、こうした試行錯誤の繰り返しです。

元シベリア抑留とラストボロフ事件関係者

明治大学名誉教授の三宅正樹先生が最近、出版された『スターリンの対日情報工作』(平凡社 2010年)の中に、「ラストボロフ事件」(注 在日ソ連代表部2等書記官ラストボロフが1954年1月24日以来行方不明になり、半年余りたった8月14日、外務省と公安調査庁が共同発表したソ連スパイ事件。ラストボロフは、ソ連内務省所属の陸軍中佐で、日本人を使って米軍情報などを集めて、ソ連に通報していたが、ソ連国内での粛清を恐れて米国へ亡命した)や暗号名「エコノミスト」という諜報員の暗躍(注 「エコノミスト」というコードネームの、ソ連内部人民委員部＝NKVD＝につながる日本人スパイが、対米英開戦の国家機密をソ連に通報していた)が出てきますが、前述した日本人2500名のファイルの中には、その関係者が多数含まれています。というよりも、MIS個人ファイルの大きな部分が、シベリア抑留帰還者からソ連体験を聞き出す、米軍の尋問記録です。ラストボロフ事件は、シベリア抑留帰還者の帰国後尋問・監視の延長上で起こったことが分かります。

ラストボロフ事件のあとで、警視庁がその捜査の概要を極秘報告書にまとめますが、ラストボロフと連絡を取っていたという35人の日本人の名前が経歴を含め出てきます。その中に「エコノミスト」の有力な候補者である外務省の高毛礼茂たかもれしげろの名もありません。MIS 資料には、そのうちの約10人、日暮信則ひぐらしのぶのりや朝枝繁春のファイルがあり、日本へ帰国後、ずっと米軍から監視されていたことが分かります。ラストボロフ事件を研究したい人は、これを丹念に追いかけていけば、相当のことが分かるのではないかと思います。

「マイジンガー・ファイル」記載のゾルゲ

次に、MIS のマイジンガー・ファイルの話を行います。ヨーゼフ・アルベルト・マイジンガーは、ゲシュタポ（ドイツ国家秘密警察）の大佐で、ナチス・ドイツの日本支部長のポストにつきました。1941年に日本に来る前は、ポーランドの首都ワルシャワで、ユダヤ人狩りの先頭に立ってユダヤ人撲滅をやったため、「ワルシャワの殺人鬼」と呼ばれました。戦後の1945年9月、日本で米軍に捕えられてワルシャワに護送され、ポーランド人民共和国最高裁の法廷で、ホロコースト（ユダヤ人虐殺）の罪に問われ、死刑判決が下り、1947年3月7日に絞首刑に処されました。

マイジンガーは、ゾルゲ事件発覚時、日本にいました。ゲシュタポ本部からゾルゲを監視するよう命令され、来日しました。尾崎秀実の異母弟で評論家の尾崎秀樹『ゾルゲ事件』（中公新書、1963年）や、上田浩二・荒井訓『戦時下日本のドイツ人たち』（集英社新書、2003年）などが書いていますが、ゾルゲの逮捕にマイジンガーが一役買ったのではないかと、という説があります。

マイジンガーは、ゾルゲ事件発覚の半年前、1941年4月に日本にやってきますが、来日前にヒトラーの側近でゲシュタポの親分であるヒムラー直属のシェレンベルク（ドイツ中央保安部海外情報部長）から、「東京にいるフランクフルター・ツァイトゥング紙特派員ゾルゲは、ソ連と通じている疑いがある。君はゲシュタポとして日本に行ったら、ゾルゲのことをよく調べて通報せよ」との命を受けて、東京に赴任してくるのです。

ところが、マイジンガーは41年4月来日時に、日本の特高警察に自分の密命を洩らしてしまう。これによって、特高のゾルゲに対する監視が強まったと思われる。ゾルゲが捕まる3ヵ月前の41年8月に、ゾルゲの日本人妻石井花子が鳥居坂署に呼ばれて取り調べを受けたのは、マイジンガーが「ゾルゲは怪しい」と特高警察高官に告げたことと、関係がある可能性があります。

ただし、日本にやってきたマイジンガーは、ゾルゲと酒を飲んで意気投合し、自分が在日ゲシュタポの責任者なのに、ナチス党员としてのゾルゲを高く評価し、日本の憲兵隊には、ゾルゲの身元を保証する役割を果たしたのです。戦後、米軍の尋問に答えたマイジンガーのMIS記録では、自分が日本で情報収集に使っていた内務省や憲兵隊の日本人名を明らかにしています。また、日本在住の反ナチ・ドイツ人の名簿を作っていましたが、その中にゾルゲの名前は入っていません。マイジンガーは、ベルリンで「ゾルゲは怪しい」と言われて日本にきたのに、「ゾルゲは信頼できる」と保証したのが本当らしい、と分かりました。

マイジンガーは日ソ戦を画策した

きょうお渡しした資料の中に、英文のANNEX 3というのがあります。（そう言って、見本を見せる）これは、マイジンガー尋問調書に付された、米軍によるゾルゲ事件のまとめです。関心のある方は、あとでゆっくりご覧ください。これによると、マイジンガー自身はシェレンベルクから聞いて、ゾルゲがソ連と関わりがあったことを知っていた。しかし、ゾルゲの逮捕のもとになるスパイ活動までは知らなかった。それどころか、マイジンガーは在日ドイツ大使館のオット大使とゾルゲを使って、日本をソ連と戦争させようと画策したが、東条内閣ができて失敗した。これが、米国側のマイジンガー評価です。

そして、ゾルゲが逮捕されたことによって、マイジンガーを含む在日ドイツ人社会が大騒動になったことが記されています。駐日ドイツ大使のオットは、ゾルゲが1941年10月18日に逮捕されて以後、10月いっぱい「ゾルゲがスパイであるはずがない、自分の親友だ」と信じていました。しかし、12月になって、日本側からゾルゲがモスクワにつながっていた資料の提供を受け、ゾルゲがソ連スパイであることを信じるようになりました。42年4月に、ベルリンからゾルゲの共産党歴を証明する調査資料が東京に届いたので、「ゾルゲの罪状が本当だ」と最終的に確信するようになった、と報告されています。

日独関係に波及せぬよう、もみ消をはかる

この間、ドイツ大使館は、日本政府に対して「ゾルゲに会わせろ」「ゾルゲの尋問をさせろ」と盛んに要求しました。この対応の日本側窓口は、「横山」という人物だったと、マイジンガー調書に出てきます。ゾルゲがスパイということになると、日独同盟にひびが入るので、日独双方で手打ちをしようという話もあった。日本側の横山は、「ゾルゲの国籍はドイツではなくソ連だった」と発表することを提案しました。しかし、マイジンガーはこれを拒否しま

した。それではゾルゲは女たらしだということにして、オット大使からはもちろん、近衛側近の情報も手なづけた女性から情報をとっていたことにして、「ハニー・トラップ」(密の落とし穴=女スパイの罠)にはまって捕まったことにしようと、日本側は提案したそうです。しかし、ゾルゲ自身が『獄中手記』で自らの使命をはっきり語るようになったため、こういう隠蔽工作は潰れてしまいました。その間ドイツ側は、日本政府に対して、約40の尋問項目を作成して、ゾルゲの取り調べを要求するのですが、司法省はこれを拒否しました。これらによって、日本の特高警察によるゾルゲ逮捕により、日独関係が大変ぎくしゃくしたものになったことが、マイジンガー・ファイルの付録に記録されています。

ただし、米軍がいちばん関心を持ったのは、ゾルゲ事件ではなくて、マイジンガーによるワルシャワでのユダヤ人のホロコーストでした。マイジンガー・ファイルは全部で4000ページほどある膨大なものですが、そのうちゾルゲ関係は30ページもありません。しかし、ゲシュタポ・マイジンガーが使っていた日本人エージェント Kawaguchi, Funatsu の名前など、日本ではほとんど知られていない情報が入っていて、それなりの意味があるのではないかと思います。

当時、日本に住んでいたドイツ人の中には、祖国ドイツを愛し、日独伊3国同盟も評価するものの、ヒトラーの言う通りにドイツが進んでいったら将来はどうなるかという不安がありました。総統ヒトラーに対する不信・反感がありました。そのヒトラーの手先であるマイジンガーについて、在日ドイツ人の間でも「自分のことをスパイだと本国に密告するのではないか」という恐怖が溢れていたことが、マイジンガー・ファイルからうかがうことができます。

ウィロビーはFBI長官に「ゾルゲ事件」を報告

米国国立公文書館では、今お話しした陸軍情報部 MIS ファイルのほかに、米国連邦警察局 FBI のファイルも公開されています。FBI は米国内の連邦警察ですから、ゾルゲ事件とは関係がないように思われますが、外国人の出入国のほか、非米もしくは反米活動をした米国人を取り締まります。米国在住の人々を調べ逮捕する権限を持っているのは、CIA でも MIS でもなくて、FBI です。今回 FBI ファイルを調査して分かったのは、日本でゾルゲ事件の調査をした GHQ/G-2 ウィロビー少将は、本来なら国防総省(ペンタゴン)のほか国務省や CIA にも調査報告を提出すべきなのに、CIA とは距離をおき、FBI のフーバー長官に直接送付して、FBI の「赤狩り」=マッカーシズムに協力していたことが分か

りました。

その資料は、G-2 ウィロビーの FBI フーバー長官宛の手紙類です。真珠湾攻撃直前の日本でゾルゲ事件が摘発されて、そのソ連の諜報活動にアメリカ人コミunistが関わっていたことを、知らせる内容です。昨年ここで報告したとき、米国の戦後の対ソ封じ込め政策の立案者、ジョージ・ケナン(注 米務省初代の政策企画委員長。のちに駐ソ米大使となったが、ソ連に忌避されて退官。米務省顧問を務めた)に、ウィロビーが資料や手紙を送っていたことをお話しましたが、今年はこちらに加えて、FBI フーバー長官に注釈付き手紙で、ゾルゲ事件関係資料を渡していたことが分かりました。

それが何に使われていたかという点、ウィロビーの主たるターゲットは、アメリカ人女性ジャーナリスト、アグネス・スメドレー(注 コミュニズムの同調者。ドイツの日刊紙フランクフルター・ツァイトンクの記者として、戦前、中国に渡り、12年間中国紅軍に従軍、その活動を現地報告した。主要著書に“Daughter of Earth”1929年。邦訳書名『女1人大地を行く』角川文庫。尾崎秀実訳、1953年、“China Fights Back”1938年。邦訳書名『中国は抵抗する』岩波書店、高杉一郎訳、1965年、“The Great Road”1955年。邦訳書名『偉大なる道』上下2巻、岩波書店、阿部知二訳、1955年などがある)でした。彼女を中心に、ゾルゲ事件が FBI に報告されている。さらに今回見つけた FBI ファイルの中では、ジョン・サーヴィスという米務省の中国問題専門家も、ウィロビーのフーバー宛手紙で、告発されています。

いわゆる赤狩りの「マッカーシー旋風」が吹き荒れた時代に、槍玉にあがった米国公務員たちの名前を特定するさい、アグネス・スメドレーやエドガー・スノウ(注 中国共産党と紅軍が長征ののち延安に本拠を構えると、外国人記者として初めて解放区に入り、中国紅軍に従軍してその見聞記“Red Star over China”1938年。邦訳書名『中国の赤い星』宇佐美誠次郎訳、筑摩書房、1952年を刊行した)が中国で会ったことのあるアメリカ人のリストが作られ、FBI によって手当たり次第に調べられていることが分かりました。

在米日系人名簿に北林トモら450人の名前

さらに、渡部さんのように、これまでゾルゲ事件の研究をしてきた人たちに興味ありそうなのは、1934年5月 FBI 作成のロサンゼルス地区米国共産党員名簿です。日系人コミunistの名が、約450人分あります。これは、今まで渡部さんたちが探してきた1933年、ならびに1938年の名簿とは違うものです。FBI が独自に作った名簿らしく、この

中にはジョー・コイデ（小出）、鬼頭銀一、木元伝一、秋山幸治らは出てこないのですが、「ミヤギ・Y」がコミunistとして出てきます。それから北林トモは、住所まで含めて正確に出てきます。

これまで見つかった日本側の在米日本人コミunist名簿は、FBI を通じて日本領事館に渡り、作られていたのかもしれませんが。FBI では何度か日系共産党員名簿が作られていて、それらの中に北林トモの名前は共通して入っています。ただし、宮城は名前のイニシャル Y のみなので、宮城与徳であるか、従兄でソ連に亡命し肅清される与三郎かは、よく分かりません。これが作られたのは 1934 年ですが、フーバーの手元に届けられたのは、1942 年です。これは、西海岸の日本人・日系アメリカ人は太平洋戦争が始まって、翌 42 年に強制収容所に送られるので、そのときどんな日本人か、その素姓を調べるために、このコミunist名簿が使われた可能性が高いのです。

以上から、戦前ゾルゲ事件に関わったアメリカ市民は、戦後も「ソ連スパイとして活動するかもしれないから要注意！」と警告を発するために、陸軍情報部のウィロビーが、FBI フーバー長官に情報を流していたことが明らかになったわけです。

在独日本大使館に浸透していたスパイの記録

このほか FBI 資料のなかで面白いのは、ドイツにおける軍と警察の関係です。ゾルゲ事件は、在日ドイツ大使館に入り込んだソ連スパイの問題でしたが、在独日本大使館に入り込んだドイツのスパイの記録がありました。

ドイツには、ナチスの政治警察「ゲシュタポ」に加え、国防軍の中に「アプベア」と呼ばれる軍の諜報機関があって、同盟国であっても日本を信用せずに、ベルリンの在独日本大使館をスパイしていました。ゾルゲはドイツ大使館を足場に諜報活動をやり、それに尾崎秀実がからんで日独同盟がぎくしゃくするわけですが、ドイツ側も似たようなことをやっていて、大使館という外交機関は、情報戦の格好の舞台であったわけです。

戦時中、ベルリンの日本大使館に送り込まれていた国防軍アプベアのドイツ人スパイは、ウイルヘルム・クラッセンと言います。山口高商に留学経験を持つ、当時ハイデルベルク大学の講師です。このクラッセンが、日本大使館の大島浩大使、内田藤雄とか、小島秀雄、酒井直衛ら駐在武官に密着して、彼らが果してドイツとヒトラーに忠実であるかどうかを、品定めしていたのです。

ゾルゲ事件では、ゾルゲ諜報団が日米開戦前に日本が「北進」（対ソ侵攻）せずに「南進」（日米開戦）することを事前に察知してソ連に伝え、ゾルゲが「ソ

連邦英雄」になったのですが、実はこの種の話は、知られていない形で世界中にいくつもありました。そういう知られざる諜報活動を含めて、第2次大戦で枢軸国に勝利した米国は、日独伊枢軸国の軍事外交文書をたくさん集め、徹底的に研究していたことが分かる資料が、FBI ファイルに入っているわけです。

共産党員「鬼頭銀一ファイル」、ロシアで発掘

この種の個人資料は、旧ソ連秘密資料として、ロシアでも公開されていることは、昨年この席で述べました。その中に、米国共産党員であった日本人のファイルがあります。そのうち旧ソ連の「木元伝一ファイル」「鬼頭銀一ファイル」を、私の教え子の関東学院大学島田頭講師らが、今春モスクワに行つて見つけてきました。そこで、これを使った調査の概要をお話することにします。

1つは、「鬼頭銀一ファイル」です。米国共産党日本人部の鬼頭銀一が、ゾルゲと尾崎を最初に上海で引き合わせたことの重要性は、皆さんの会で再三述べてきました。その鬼頭銀一が、米国共産党員であったことを証明するファイルが、ロシアで出てきました。米国共産党員が出国して他国へ行くときには、公的な旅券と査証とは別に、共産党の出国許可と転籍証明書が必要だったようです。鬼頭の場合は、日本に帰国するという名目で、転籍証明書を申請・受理しており、それを日本共産党に提出すれば、そのまま日本共産党員としてコミunistの活動を続けることができるのです。彼は、実際には日本ではなくて中国に向かったのですが、この関係書類が、わずか2ページだけ、ファイルとして見つかりました。1929年1月3日付で、米国共産党から出国許可証と転籍証明書の2通の文書が実際に出ているのを確認しました。

ゾルゲ事件との関係で言うと、鬼頭銀一が上海に入るのは、1929年6月ごろです。しかも28年末までは、私の米国議会図書館所蔵米国共産党ファイルの調査では、米国共産党日本人部の初代書記で、若くしてトップになっていました。そのあとで、第2代書記ジョー・コイデ（鵜飼宣道）に代わるのですが、29年1月に出国したとすれば、1ヵ月もすれば上海に現れたはずですが、ところが、中国到着は6月で、半年の空白があります。これは恐らく、モスクワではなくて、米国内で諜報員教育を受けていたと推測されます。米国共産党には「ナショナル・トレーニング・センター」といって、コミンテルン（共産主義インタナショナル）の国際連絡部（OMS）とつながる、秘密の幹部養成学校がありました。鬼頭はそこで半年間、上海で行なうコミンテルン工作の訓練を受けたのではないかというのが、私の見方

です。

ニューヨークの米国共産党支部のサインがあるので、表向きは日本に帰ることになってはいたけれども、国際的な任務については支部には知らせなかった。米国共産党籍を離れて、モスクワの OMS 直属の要員となることは、米国共産党中央委員会書記長ブラウダーらは知っていたでしょうが、地区の党員は何も知らなかったであろうことが、鬼頭ファイルからうかがうことができます。

ニューヨークの高級住宅に住んでいた鬼頭銀一

鬼頭の出国許可証・転籍証明書には、彼の米国の住所が書いてあったので、それをこの夏に実地調査しました。ニューヨーク66番街東4番地です。日本人の米国共産党員ですから、ニューヨークのハーレムのような貧しい地区に住んでいたのだらうと思って現地へ行ってみたら、とんでもない。ビートルズのジョン・レノンが住んでいたダコダハウスに近い、超高級マンションだったので、びっくりしました。まさに億ションでした。

鬼頭は、上海ではビジネスマンとして国際運輸KKで働くので、米国・デンバー大学卒のビジネスマンに仕立てあげる工作の1つ、とも考えられます。もう1つの仮説は、デンバー大学学生の時鉄道王の大金持ちのスポンサーがついたという話が、ご遺族には伝えられていますから、そのニューヨークの住居を借りたとも考えられます。どちらか真偽のほどは分かりませんが、いずれにしても、コミンテルンが外国に工作員を送るときに、身元がばれないように偽装することは、よくあります。現に、アイノ・クーシネン(注 フィンランド出身の共産主義者で、スターリン時代にソ連共産党政治局員となったオートー・クーシネンの妻。ゾルゲが東京で諜報活動をやっていたとき、ソ連軍参謀本部第4部=のちのGRU =から東京に派遣され、ゾルゲとは別個に諜報活動をやっていた。皇族関係に強く、秩父宮は彼女の情報源であった)の場合は、スウェーデンのストックホルムの超豪華ホテルに、3ヵ月も住んで日本人向けの本を書き、日本では帝国ホテルを常宿にして、北欧貴族出身の身分を装って秩父宮周辺の人々や朝日新聞記者などに近づきました。従って、鬼頭銀一も同じようなことをやっていた可能性があることが、旧ソ連の個人ファイルから分かるわけです。

全部で16ページの「木元伝一ファイル」

もう1つは、「木元伝一ファイル」、すなわち宮城与徳を日本に送り込んだ「ロイ」と思われる人物のモスクワ個人ファイルです。ロイ・フレックとも言い、以前、渡部さんが「ロイは木元伝一である」と特定した人物です。ソ連のコミンテルン国際レーニン学校に、米国共産党から派遣されていました。

去年は、米国 MIS の木元ファイルを紹介しましたが、旧ソ連の「木元ファイル」は、全部で16ページあって、レーニン学校の成績表や、英文で書いた自筆の履歴書のほか、活動評定などが入っています。学業は優秀な成績だったが、「米国共産党日本人部カルフォルニアのボスであった武田こと、豊田礼助の党内官僚主義と十分に闘わなかった」とコメントされています。ただし、宮城与徳との関係は出てきません。必要なら、日露歴史研究センターに提供しますので、大いに活用してください。

大英図書館所蔵の日本語以外のゾルゲ本

さて、次は、英国の話をしてします。私はロンドンに幾度か行きましたが、史資料探しは今度が初めてでした。さきほどお話しした国際ペンクラブの本部がロンドンにあるので、それを調べたさいの副産物の話になります。

1つは大英図書館(British Library)です。これは大英博物館から独立したもので、カール・マルクスが『資本論』を書いたことで有名な図書館です。ここは古今東西、世界中の図書が集まっていることで知られています。ここでゾルゲを索引で調べると、面白いことが分かりました。ウィロビーが書いたゾルゲ事件報告の本のタイトルは、『上海の陰謀』(原題“Shanghai Conspiracy”)で、アグネス・スメドレーら上海在住のアメリカ人が関わったスパイ事件、非米活動だという警鐘でした。ところが、米国向けではなく、英国人向けのロンドンで刊行された本の題名は”Sorge: Soviet Master Spy”(ゾルゲはソ連のスパイ王者)でした。同じ英語版でも、表題が違います。しかし、出版年も内容もまったく同じもので、一般読者を想定してタイトルだけを使い分けていました。

もう1つ面白いことが分かりました。John Mendelsohn が編集した、”Covert Warfare: Intelligence, Counterintelligence, and Military Deception During the World War II Era”(隠れた戦争—第2次世界大戦期における諜報、対敵諜報、軍事偽装)というシリーズがありまして、その第7巻に、“The Case of Richard Sorge”(リヒアルト・ゾルゲ事件)という資料集があります。これは何かと言うと、ウィロビーの収集した資料と記録が写真版で沢山出てくる、米軍が諜報教育用に作った教材です。情報活動に携わる者があらかじめ知っておかねばならないことを教える教材としてまとめた、歴大なものです。日本語資料も写真で入っています。みすず書房の現代史資料『ゾルゲ事件』にある供述書が、写真複写(フォトコピー)されて収録されています。当時の日本語、英語、ドイツ語の新聞記事のコピーが入っています。

これは、米国 CIA、MIS や英国 MI-5（英国機密諜報部）、MI-6（英国対外諜報部）に属する諜報員のインテリジェンス活動に必要な勉強をするための教材として作られており、その教科書と思われるものです。ゾルゲ事件は、「ヒューミント」(Humint)によるスパイ活動としては、大変優れた典型的スパイ活動だったと、序文にあります。「ヒューミント」とは、暗号とか文書を使ったスパイ活動ではなくて、人間を動かしてスパイ活動を行なうことを意味する言葉です。

英国国立公文書館で独側第1次資料も確認

ロンドン郊外の英国国立公文書館(The National Archives)での調査についても、話しておきましょう。ここはダウタウンの大英図書館とは別で、こちらに外交文書など第1次資料があります。きょう三宅正樹先生やドイツ研究者がお見えになっていれば聞きたかったのですが、私はゾルゲ事件が発覚したとき在日ドイツ大使館、ドイツ政府内でどのように反応したのか、ドイツ側の記録を探していました。米国国立公文書館には、そのようなまとまった文書記録は見当たりませんでした。ドイツの連邦公文書館、ドイツ外務省資料館も調査したことはありますが、まとまった形では発見できませんでした。三宅先生がこの本（と言って、平凡社新書『スターリンの対日情報工作』を右手に掲げて見せる）で書いていますが、『ドイツ外務省外交文書 D シリーズ』中に、ゾルゲ事件が起きたときの在日ドイツ大使館と、ベルリンのドイツ外務省との間の連絡文書がいくつか出てきます。

今回分かったことは、ドイツ敗戦時の連合側捕獲文書のうち、英国国立公文書館には、在日ドイツ大使館とリップントロップ外相の個人事務所（外務省ではなくてナチ党の事務所）が交わしたゾルゲ事件についての電文と、ドイツ外務省の公的記録の双方の、数百ページの資料がありました。三宅教授や田嶋信雄成城大学教授の『ナチズム極東戦略 日独防共協定を巡る諜報戦』（講談社選書メチエ、1997年）でも使われていないため、日本では新発掘と思われる。

ドイツ側がゾルゲ逮捕時に事件をどう受け止めたのかは、ディーキン、ストーリの共著“The Case of Richard Sorge”Chatlo and Windus Ltd.1980（邦訳書『ゾルゲ追跡』筑摩叢書、1980年）の冒頭に書いてあります。この部分は日本研究のストーリ教授ではなく、ドイツ外交が専門のディーキン博士が書いたらしく、大変すぐれたものですが、資料の出所を明記していません。どうも今回私が見つけ出した英国が捕獲したドイツ外務省資料を使っているようです。

ゾルゲが捕まるのは1941年10月18日、この日は第3次近衛内閣が潰れて東条内閣が発足する日です。このため、日本の内閣が変わったと言って、在日ドイツ大使館は慌ててドイツ本国に報告するわけですが、この時在日ドイツ大使館が本国に送った電報の中には、ゾルゲが捕まったことは、一言も出てきません。東条内閣が発足したという情報だけです。

ゾルゲ逮捕を巡る在日大使館と本国のやり取り

ところが、10月23日にゾルゲが捕まったらしいという極秘情報が東京のドイツ大使館に入ってきて、10月25日以降、ドイツ本国の外務省との間でも、ゾルゲ事件について電報のやり取りが行なわれました。ドイツ側は、初めはベルリンの在独日本大使館から情報を取ろうとしたのですが、大島浩大使は何のこともやらさっぱり分かりませんでした。ゾルゲが捕まったのは日本人共産主義者を使って情報を取ったからだろうと言い、ゾルゲがソ連のスパイであるという話は、一切出てきません。ゾルゲが逮捕されてから1ヵ月後の11月になってようやく、ゾルゲはハンブルグで共産党に入党したコミュニストで、上海で諜報活動をやっていたことも分かり、42年3月までにドイツ側の本国での調べがについて、「日本警察の捜査記録が本当だ」という結論に達したのです。

しかし、「イエロー（黄色人種）の日本人がゲルマン民族のわがドイツ人（白色人種）を調べるのはけしからん」という気分があり、マイジンガーたちは「ゾルゲの身柄を引き渡せ」「尋問させろ」と幾度も日本政府にねじ込むのですが、日本政府から断られたというのが真相です。そういうことが分かるので、全文ドイツ語のこの記録は（と言って右手に掲げて見せる）、写真の状態が悪く読みにくいので、まだ詳しくはみておりませんが、相当重要な記録文書だろうと思います。

「デイリー・テレグラフ」紙の報道記事

あと1つだけ、英国の資料を紹介しておきます。英国国立公文書館所蔵のリップントロップ事務所ゾルゲ事件文書の中にあつた、新聞記事です。『デイリー・テレグラフ』という英国の伝統ある新聞の1941年11月22日付に、どこから情報が洩れたのかは不明ですが、ゾルゲの逮捕から1ヵ月後に、シンガポール発で「東京でナチスのスパイが捕まった、ドイツは抗議したが、日本側は無視している」という記事が掲載されているのです。

当時、東京にいる外国人ジャーナリスト仲間の間では、ゾルゲが突然いなくなったので「どうしたのか？」と噂が広まって、多分、その辺から出た情報と思われる。この記事では、ゾルゲは、「ナチスのスパイ」として日本側に捕まったらしいというの

です。「東条内閣ができて日本とドイツの同盟関係に大きな困難が生まれた」というのが、デーリー・テレグラフ紙の観測です。日本側の司法省発表は1942年5月16日ですから、情報統制のほころびです。

英紙のこのニュースを見て、リップントロップも「一体どうなっているのだ」とオット大使に問い合わせました。オットも初めは何が何やらさっぱり分からなかったが、いろいろ調べた結果、ゾルゲは共産主義者で、ソ連スパイだという結論に至るのです。これがおそらく、当時の連合国側で初めて報じられたゾルゲ事件の報道になります。英国国立公文書館には、このほかにも、在独日本大使館大島浩関係文書や「ヌーラン事件」関係文書があるようです。

トマス・カンペン教授の活発な研究

最後に取り上げるのは、ドイツです。ハイデルベルク大学のトマス・カンペン教授と会って研究交流し、彼の研究資料9本の提供を受けました。彼は、もともと1920年代/30年代の上海におけるドイツと中国の2国関係を研究している中国研究者です。日本語はできません。数年前に私は個人的に知り合い、英語とドイツ語で研究交流しています。彼は私と似てインターネットの達人で、ハイデルベルク大学東洋学研究所のホームページに、多くのゾルゲ事件に関する短いエッセイを連載しています。そのいくつかは、日露歴史研究センター『翻訳集』にも訳出されました。

今、カンペン教授が進めているのは、旧東独時代に流布したドイツ語でのゾルゲ事件研究の批判的検討です。リヒアルト・ゾルゲの回りにいたルート・ウェルナー（注 ゾルゲの上海での諜報活動の助手、本名ウルズラ・クチンスキー、別名「ソニア」）の『ソニア・レポート』（1977年）、ユリウス・マーダー（注 東独のゾルゲならびにゾルゲ事件研究者）のゾルゲ研究など、東独のゾルゲ事件研究にどんな問題があったかを、英語・ドイツ語・中国語の資料を用いて再検討しています。アグネス・スメドレーと中国人の女友達、尾崎やゾルゲがマルクス主義文献などを購入した上海の「ツァイトガイスト」（時代精神）書店の女性経営者イレーネ・ウァイデマイヤーについての研究もあります。

これらは順次『翻訳集』に紹介されるということですから、今日は時間の都合で、ゾルゲの上海時代、彼の助手をつとめ、スメドレーや中国人情報提供者との会合の隠れ家を提供したルート・ウェルナー、すなわち「ソニア」が書いた『ソニア・レポート』について、若干、言及することにします。この本は、もともと1977年にドイツ語で出されたものですが、ドイツ語でも英語でも新版が発行されていて、

楊国光さん（注 現代中国のゾルゲ事件研究者）が昨年11月に日本で出版した『ゾルゲ、上海ニ潜ス 日本の大陸侵略と国際情報戦』（社会評論社、2009年）にも、かなり引用されています。

原爆スパイ・フックスを獲得した「ソニア」

「ソニア」は、本名をウルズラ・クチンスキーと言って、東独の有名なユダヤ人経済学者であったユルゲン・クチンスキーの妹です。彼女は、建築家の夫と結婚して渡った上海で、ゾルゲの諜報活動の助手を務めました。本日、お配りしてある資料に、彼女の名前が出てきますが、これはウイキペディア（インターネット上の百科事典）から取ったものです。日本語では出ていませんが、英語でもドイツ語でも、ウイキペディアで詳しく知ることができます。

それだけではありません。「ソニア」＝ルート・ウェルナー＝ウルズラ・クチンスキーについては、今、インターネット上に情報が溢れております。それらを見ると、彼女は上海でゾルゲ諜報団の一員であったばかりではなく、実はもっと大きい旧ソ連赤軍諜報総局（GRU）の仕事をやっていたことが分かります。

「ソニア」は今、ゾルゲ以上のスパイだったと評価されています。戦後ソ連の原爆スパイ、クラウス・フックスを英国で1943年に獲得し、米国のマンハッタン計画の原爆開発情報をソ連に流し、旧ソ連の原爆開発に貢献した女スパイということで、騒がれているのです。最新、英語・ドイツ語で再版された『ソニア・レポート』が広く読まれているのは、ベルリンの壁崩壊後の彼女の晩年のインタビューが増補されているからです。それと、米国での『ヴェノナ』文書の公開、英国での『ミトロキン文書』の公開で、旧ソ連の原爆スパイの全体像が見えてきて、そのキーパースンの1人であるクラウス・フックスを英国で赤軍の諜報員に獲得した女性として、彼女の名前がクローズアップされているのです。（クラウスは、かつてドイツ共産党のシンパであった。その時ウルズラの兄ユルゲンと知り会っていた。1933年、ナチスが政権を取ると、クチンスキー一家（クラウスも）はロンドンに亡命、2人は再会することになる。こうした人脈が、ウルズラとフックスを結びつけた）

彼女は、上海ではまだ、単なるゾルゲの協力者だったと回想しています。その上海での活動を評価し、ソ連赤軍諜報総局（GRU）に推薦したのが、リヒアルト・ゾルゲということになっています。

「ソニア」は、ゾルゲと違って、1度も捕まることがなく、戦後も生き延びた赤軍諜報員です。1937年と1969年の2回、ソ連への貢献で勲章を受けています。東独で有名な経済学者のユルゲン・

クチンスキーの妹である「ソニア」＝ウルズラ・クチンスキーは、戦後は東独に戻り、やがて作家として晩年を、ペンクラブや文化政策でも重要な役割を果たすこととなります。今では、「スターリンの最高のスパイ」「ソニアほどのスパイが5人もいたならば、世界は変わっていただろう」とも言われています。上海の次にソ連に行き、諜報教育を受け、満州国（中国東北部）、スイス、ポーランド、それから英国の地で任務につき、「ケンブリッジ・ファイブ」と呼ばれるケンブリッジ大学におけるソ連スパイの養成に、大きな役割を果たしたのです。

夫ルドルフ・ハンブルガーも赤軍諜報員だった

「ソニア」は3回結婚していますが、その最初の夫、幼なじみの建築家ルドルフ・ハンブルガーも、赤軍 GRU に関わったとされています。ただし、同じウィキペディアでも、「ソニア」＝ウルズラ・クチンスキーの項目は、英語版とドイツ語版では、内容がかなり異なっています。英語版のウェブ上では、彼女の上海時代の夫であったルドルフ・ハンブルガーが、ゾルゲその他を動かす上海の赤軍諜報部のヘッド、親分であったという情報もあります。「ソニア」の家がゾルゲと中国人の連絡場所に使われたのは、実はハンブルガー夫妻が、ゾルゲを使う側の指導的立場のスパイだったからだという説も流されています。

ただし、カンペン教授らドイツでの研究によると、ハンブルガー夫妻はゾルゲに使われることによってソ連赤軍とつながるようになり、ゾルゲが上海を離れてから本格的な諜報員の訓練を受け、ソ連スパイとなったとあります。

「ソニア」と離婚したルドルフ・ハンブルガーは、その後、中国、トルコ、イランでソ連 GRU のスパイをやり、イランの首都テヘランでイギリス人につかまり、1943 年に「捕虜交換」でソ連に送還されたときは、「米国の逆スパイ」だとされて強制収容所に送られ、5年の刑に服したあと、1955 年にやっと東独に帰りました。ゾルゲが中国側との連絡場所に使っていたハンブルガー夫妻の住居が、上海におけるゾルゲの諜報活動を考えるうえで、極めて重要なものでした。

「南京虐殺」証言者ジョン・ラーベとの繋がり

ルドルフ・ハンブルガーは、元々建築家でした。ドイツ語のウィキペディアでは、上海の近代都市建築に大きな役割を果たしたと書かれています。『ソニア・レポート』では、政治的には妻より遅れた共産主義のシンパサイザーとして描かれていますが、その彼が赤軍のスパイだったことが分かったことによって、その周辺の人々にも、新たな光が当てられています。

ゾルゲの秘密の会合場所であったハンブルガー夫妻の家は借家で、その持ち主は上海の商人ヘルムート・ボイトでした。1950 年代に、西独で影響力のある週刊誌『シュピーゲル』が連載した「ゾルゲ事件特集」記事では、「ボイト」は「謎のドイツ人」とされていました。カンペン教授らの調査では、このボイトが、『ソニア・レポート』に出てくる「ワルター」(Walter)と同一人物で、当時ドイツ最大の電気会社 AEG の上海支社長で、ゾルゲらの活動に理解を示していたビジネスマンだったと解明しています。ディーキン、ストーリィ共著『ゾルゲ追跡』では「ヴォイクト博士」の名で出てきて、ゾルゲが日本に活動の場を移してから、彼から、中国の経済情報を得ていたとされています。

「ソニア」の上海時代の夫ルドルフ・ハンブルガーの親友だった、もう1人の著名な建築家リヒャルト・パウリク (Richard Paulick) も、GRU および中国共産党と結びついて活動していたといわれています。

その延長線上に、ハンブルガーやパウリクの友人ジョン・ラーベ (John Rabe) も出てきます。最近、「南京事件」(1937 年 12 月 13 日、当時の中国の首都南京を占領した日本軍が中国人に対して行なった大虐殺事件。中国側の発表によると、犠牲者は43万人と言われている。当時の方面軍司令官松井石根大将は、戦後の東京裁判で虐殺の責任を問われて、絞首刑になった) の証言者として有名になり、昨年には、独仏中合作の映画『ジョン・ラーベ』が作られました。日本では未公開ですが、世界的に話題を呼んでいます。その映画製作の過程で、当時、ドイツの世界的コンツェルン、ジューメンス社の中国総支社長であったジョン・ラーベの交友関係が、クローズアップされました。

日本にもナチ党の支部があり、ゾルゲも入っていたように、当時の中国にもナチスの支部があり、ゲシュタポも活動していました。ですから、1930 年代の在中国ドイツ人社会で指導的立場にある、ビジネスマンやジャーナリストも、その多くはナチ党員であったといわれています。ラーベはナチス党南京支部副支部長でした。そのナチス党員のドイツ人にとってさえ、日本軍の大虐殺は残酷で、否定できない事実でした。戦後、ラーベはこのかけがえのない「日記」を持ち帰り、それを元に『南京爆撃』という表題で2冊の本にまとめました。ラーベは 1950 年に死んだが、1995 年、ラーベの孫、ウルズラ・ラインハルトの熱意で「日記」を、ドイツ語表題『ヨーン・ラーベの記録 南京の善良なドイツ人』という本に編集して、出版されました。邦訳書『南京の真実』講談社 1997 年。今、同書は、国際的に南京事

件についての重要な資料になっています。

このジョン・ラーベについての映画が、昨年、ドイツ・フランス・中国の合作で作られました。篠田正浩監督が『スパイ・ゾルゲ』を作ったように、ラーベは「中国人のシンドラ」と評されています。すでにドイツ、中国を含む世界中で封切られています。ところが、日本ではこの合作映画はなぜか、上映禁止というか、右翼の攻撃をおそれて配給・上映する会社がないので、観ることができません。(南京が日本軍によって陥落したとき、ラーベは国際安全区委員会の代表として献身的に中国人を救おうとして活動した。ドイツ人シンドラは、ナチス支配下で、実業家として様々な工夫をして、ユダヤ人の命を救った。助けられたユダヤ人の名は「シンドラのリスト」として有名。同様に日本人「杉原千畝ビザ」も有名である)

この映画を作るときに、ジョン・ラーベと同時期に、中国にいたドイツ人たちの記録が、数多く発掘されました。それによると、ジョン・ラーベの周辺のドイツ人たちは、ナチ党员でありながら、ヒトラーにまかせておいたらドイツは大変なことになると言う懸念もあって、日本の中国侵略を非難し、日独同盟に反対し、中国民衆に協力していたといえます。ハンブルガー夫妻に家を貸していた家主の「ワルター」＝ヘルムート・ボイトも、そうした1人でした。

こんな関係で、「原爆スパイ」クラウド・フックスを養成した女スパイ「ソニア」、すなわちルート・ウェルナー＝ウルズラ・クチンスキー、そしてその夫だったルドルフ・ハンブルガーも、赤軍 GRU に在籍していたという事実から、ゾルゲ事件とは別に、中国での旧ソ連の大きな諜報網が明らかになってきています。

その関係の資料を掘り起こしているのが、ハイデルベルク大学のカンペン教授たちです。いずれもドイツ語論文ですが、短いものが多いので、白井さんにお渡ししておきました。著作権無償で、いくらでも日本語に翻訳して使ってもらって構わないという了承を得てきました。今後、この種の貴重な資料が日露歴史研究センター発行の『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』に続々と掲載されることになると思いますので、興味のある方は、ぜひ『翻訳集』を定期購読して、ご覧ください。ドイツではこれらのほか、たぶん旧西独では初めての、ゾルゲ事件に特化した出版物 Michael Barthels, Der Fall Richard Sorge, Grin Verlag, 1998 も入手しましたが、20ページほどの概説書ですので、ここでは割愛します。

事件研究への「多頭制アプローチ」の必要性

このほかまだ、いろいろ、報告したいことがあります。時間となりましたので、最後に結論的な

ことを申し上げて、締め括ることにします。それは、ゾルゲ事件に対するアプローチについての問題提起です。各国の違いばかりでなく、軍と警察、官庁毎の違いを採り入れた、「多頭制アプローチ」の必要性を提唱しておきます。

これは、ナチス研究の分野で進められていますが、もともとナチ党から生まれたドイツ国家秘密警察(ゲシュタポ)と、伝統あるドイツ国防軍の諜報機関(アプベア)の活動との間に、大きな対立がありました。1944年7月にヒトラー暗殺未遂事件を起こすのは、アプベアの将軍たちですが、政府・官僚制とナチス党、警察と国防軍の対立関係は、かなり早い時期からドイツにあったのです。

日本だって同じです。ゾルゲの逮捕を巡って、特高警察と憲兵隊の鋭い対立がありました。憲兵隊外事課の防諜班は、日独友好関係を隠れ蓑にしたソ連の諜報員が、ドイツ人客の多い銀座のレストラン「ローマイヤー」に潜り込み、暗躍することを予期して、そこで網を張らせたなら、ゾルゲが浮かび上がり、尾行を続けていました。だが、ドイツ大使館のゲシュタポ・マイジンガー大佐が「ゾルゲは絶対に間違いない人物だ」と保証したので、尾行を中止してしまいました。

また、憲兵隊司令部直轄の無線捜査班は、東京ならびにその周辺で深夜ひんぱんに発信される怪電波をキャッチしていましたが、無線捜査班は、なかなか発信人の特定ができませんでした。それがゾルゲ諜報団が発信していた電波であったことは、一味が捕まったのちに判明します。

一方、特高警察は、憲兵隊とは別個に、米国共産党籍のあった日本人の帰国者に目を着けて、伊藤律(元日本共産党政治局員)の供述以前からゾルゲ事件の端緒を掴み、ロサンゼルス在住で米国共産党日本人部に属した北林トモ(ゾルゲ諜報団員)一宮城与徳(同)のルートで、尾崎やゾルゲに行き着き、一網打尽にゾルゲ諜報団の摘発に成功しました。この結果、憲兵隊は、もう一步のところまでゾルゲを追い詰めたのに「マイジンガー大佐の保証を信頼したばかりに、網の中の大魚を逸してしまった」(全国憲友会連合会編纂委員会編『日本憲友正史』1976年)と言って、ゾルゲ一味の逮捕の功績を警視庁にとられてしまったことを、地団駄踏んで悔しがっています。

この記述を見れば、警察と憲兵隊がゾルゲ事件の捜査を巡っていかに張り合っていたか、その角逐がうかがえます。ソ連の内務人民委員部(NKVD)と赤軍諜報局(GRU)にも肅清にからむ対立がありました。米国の FBI 対 CIA、軍と情報機関についても同様です。今、菅内閣になって、日本政府は方向

性を失っていますが、民主党の党内対立や民主党と官僚制の対立、官庁相互の対立と同じような問題が、どこの国でも、戦前からあったことを理解する必要があります。

天皇制下の戦前の日本でも、政党政治家と軍部、宮中グループと革新官僚、軍内部の戦略や戦術を巡る陸軍と海軍の歴史的な対立や抗争は、根深いものがありました。ゾルゲ事件の場合、特高警察と憲兵隊による勢力争いや功名争いに伴って、どちらが先にゾルゲ諜報団を逮捕するかという問題が生じて、ゾルゲ事件の発覚には、これが結構大きく作用しました。今後の研究では、全ての国について、こうした政府諸機関の多元性、「多頭制アプローチ」を採るべきだと思います。

決定的に重要な中国での諜報活動資料の入手

それから最後にもう1つ。ゾルゲ事件の研究者は、これまで英国の資料には余り当たったことはなかったのですが、あの国はやはりインテリジェンスの歴史と伝統がある国で、諜報資料の宝庫です。世界的に有名な作家であるサマセット・モームも MI-6 の1員でした。ソ連のスパイ「ケンブリッジ・ファイブ」の1人だったキム・フィルビーが、MI-6 の長官になりそこねた国です。

昨年は、米国のゾルゲ事件研究で、G-2 ウィロビー系列のゴードン・ブランゲと CIA 系列のチャルマーズ・ジョンソンの研究は、典拠も視点も違うという話をしましたが、今回ディーキン、ストーリー共著『ゾルゲ追跡』を読み直して、さすがインテリジェンス研究の母国、英国ならではの実証性、叙述のバランスに感心しました。現在、英国国立公文書館の「ヌーラン事件」（注 上海を舞台にしたソ連スパイ事件。コミンテルン極東部代表「ヌーラン」とその妻が共産党活動したことで 1931 年 6 月、上海市警に逮捕され、中国当局に身柄を引き渡された夫は死刑、妻は無期懲役の刑を受けた。夫妻釈放のためスメドレーらが参加して、コミンテルンの国際救援組織ができ、ゾルゲも関わった）資料を取り寄せ中ですが、「ソニア」の原爆スパイ工作の場合のように、今後英国から、重要な資料や研究が出てくる可能性があります。

ゾルゲ事件の見直しでは、今年 4 月のロシア大使館主催の日ロ・シンポジウムでも申し上げたことですが、中国におけるゾルゲの諜報活動の解明が決定的に重要です。ゾルゲの中国についての諜報活動は、日本で本格的な諜報活動を行なうための前哨戦ではなくて、むしろ主任務でした。ゾルゲは中国大陸の行方をずっと追いかけて続けました。東アジアがどうなるかという情報戦活動こそ、ゾルゲ諜報団の最大の目的であったと思われます。特に 1930 年代

は、第2次国共合作までは、日本と戦う蒋介石国民党政権で、ドイツ国防軍の軍事顧問団が重要な役割を果たしていました。ナチス・ドイツとの関わりでも、中国情報はソ連にとって不可欠でした。

ゾルゲが上海を引き上げざるをえなくなったのも、例の「ヌーラン事件」が起きて、ゾルゲ自身が租界警察に身元を知られ、中国にいられなくなって、一旦モスクワに戻って日本にやってくるのですが、ゾルゲはその後もずっと中国の動きを追いかけたいし、連絡も取っていました。スメドレーや尾崎秀実というまでもありませんが、ゾルゲの中国革命論も、再評価さるべきでしょう。

在日ソ連大使館員ザイツェフとゾルゲの接触

一言だけ付け加えますと、ゾルゲが逮捕された理由についても、渡部さんらの研究で伊藤律端緒説が崩壊してからも、いろいろ出ています。ドイツ側から洩れたマイジンガー端緒説は、先ほど紹介しました。日露歴史研究センターの発行の『翻訳集』で紹介された、ロシア側の最近のゾルゲ事件研究を検討して、私は最近、ありうるもう1つの仮説を考えています。それは、1940 年に東京の在日ソ連大使館にザイツェフという人物（注 2 等書記官）が赴任してきたことの重要性です。

ビクトル・セルゲーエビチ・ザイツェフという名は、白井さん編著の『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』（社会評論社、2003 年）に収録されたフェシュンの「秘録 ゾルゲ事件」に幾度か出てきます。人名索引では1カ所だけ、東京でゾルゲと連絡をとった在日ソ連大使館3等書記官としてしか拾われていませんが、実はフェシュンの序章でも言及され、文書 189 は、1939 年赤軍第5局第2部第1課次長から、40 年東京に派遣されたときの回想で、1964 年の旧ソ連で行なわれたゾルゲの名誉回復の検討委員会資料に使われたものです。1938 年 8 月のゾルゲの暗号電報である文書 103,104 は「ザイツェフが解説、シロトキン少佐が翻訳」とありますから、GRU 本部のゾルゲ担当官の1人であったと言っていいでしょう。アイノ・クーシネンの回想では、シロトキンとザイツェフは、1937 年末ソ連帰国時に彼女を尋問し強制収容所に送り込む、尋問官として出てきます。（『革命の墮天使たち』平凡社、1992 年）

つまり、ゾルゲ情報をモスクワ GRU で扱っていた人物が、なぜか日本に大使館員としてやってきて、41 年にはゾルゲに600ドルのカネを直接渡します。一方、ゾルゲも彼に資料を渡していたことは、フェシュンも序章でゾルゲ逮捕における「破滅的な役割」だった、と述べています。

私は以前、日本の警察がロシア大使館を見張って

いる日本外務省資料を追いかけたことがあるのですが、ソ連大使館の中には日本の特高警察のスパイがいて、大使館員一人一人の行動、大使館に出入りする日本人を常時監視していました。こういう状況下で、ゾルゲが在日ソ連大使館員と直接連絡することは、極めて危険でした。1940年から41年にかけて、上海経由の資金と情報授受が難しくなって、在日ソ連大使館員とゾルゲが直接連絡し合ったのは、ゾルゲ諜報団にとって致命的だったのではないかと考えます。ただし、今までの記録では、このことは出てきません。しかし、こうした可能性をも探ってみる必要があるのではないかと、私は思っています。

予定を10分ほどオーバーしましたが、これをもって今回の私の報告を終わります。ご静聴どうも、ありがとうございました。(拍手)

司会 加藤先生、長時間にわたって貴重な研究報告

をお聞かせいただき、ありがとうございました。上海におけるハンブルガー夫妻の諜報活動など新しい調査内容が明らかにされました。とくにゾルゲ事件研究との関係で、今後の新しい展開が期待されて、みんなワクワクする思いで聞いておりました。加藤先生が新しく発掘された資料を未公開のまま持っておられても宝の持ち腐れになるので、(笑い)是非、日露歴史研究センターにご提供して頂けませんか。そうすればわれわれの方で翻訳をして、『翻訳集』に掲載して、たくさんの人々がゾルゲ事件研究に興味を持つような環境作りができます。それは、私たちセンターの使命であるとも思っています。この点を良くお考えになって、私どもセンターに対する加藤先生のご協力を、心からお願い申し上げる次第であります。

お断り このあとで質疑応答が行なわれたが、紙数の関係で割愛した。

参考資料 ウィキペディア [英語版] Ruth Kuczynski

Ruth Ursula Kuczynski (15 May 1907, Schöneberg – 7 July 2000, Berlin, also known as Ruth Werner, Ursula Beurton and Ursula Hamburger) was a German author and spy for the Soviet Union. A daughter of Robert René Kuczynski, she joined the Communist party at an early age. After her family moved to the United States in 1928, Kuczynski became a spy for the GRU. Code-named "Sonja", she married Rudolf Hamburger, another GRU agent, and moved to China, where she operated a spy ring under the direction of Richard Sorge.

After undergoing formal training in Moscow in 1934, she was active in Manchuria in 1935, then moved to London before going to Switzerland in 1939, where she collaborated with the Lucy spy ring. She divorced later that same year, and remarried with Len Beurton shortly afterwards. In 1941 she moved to Britain and continued her activities for the GRU for most of the decade. Following the arrest of physicist Klaus Fuchs in late 1949, Kuczynski fled to East Berlin, where she retired from the GRU in 1950.

After her resignation, she worked for the East German government for a decade, then began a new career as an author. Her writings include her autobiography, Sonja's report but also several children's books.

She was awarded the Order of the Red Banner twice in recognition to her services to the Soviet Union, in 1937 and 1969.

参考資料 ウィキペディア [ドイツ語版] Ruth Werner

Ruth Werner (* 15. Mai 1907 in Schöneberg; † 7. Juli 2000 in Berlin), eigentlich Ursula Beurton, zuvor Ursula Hamburger, geboren als Ursula Kuczynski, war eine deutsche Kommunistin, Schriftstellerin und Agentin des sowjetischen Militärnachrichtendienstes GRU. Dort wurde sie unter dem Decknamen „Sonja“ geführt und bekleidete zuletzt den Rang eines Obersten.

Sie wurde als eines von sechs Kindern von Robert René Kuczynski und Berta Kuczynski in einer wohlhabenden jüdischen Familie in Schöneberg geboren. Ihr Vater arbeitete als Ökonom und Statistiker. Ihr älterer Bruder war der Wirtschaftswissenschaftler Jürgen Kuczynski.

Leben [Bearbeiten]

Ursula Kuczynski wuchs in einer kleinen Villa am Schlachtensee auf. Als Elfjährige spielte sie die Rolle des Hederl in dem Kinoklassiker Das Dreimäderlhaus (1918) von Richard Oswald. In Berlin-Zehlendorf besuchte sie ein Lyzeum. Von 1924 bis 1926 machte sie eine Ausbildung zur Buchhändlerin. Bereits zu Beginn ihrer Berufsausbildung wurde sie Mitglied im Kommunistischen Jugendverband Deutschland. 1926 trat sie der Kommunistischen Partei Deutschlands bei. 1926/27 besuchte sie eine Bibliothekarinnenschule und war Mitarbeiterin einer Leihbibliothek; anschließend war sie beim Ullstein Verlag angestellt, von dem sie wegen der Teilnahme an einer 1.-Mai-Demonstration im Mai 1928

entlassen wurde. Sie gründete die Marxistische Arbeiterbibliothek (MAB Berlin) und übernahm deren Leitung. Sie begann für die Parteizeitungen der KPD Die Rote Fahne und Welt am Abend zu schreiben. Von Dezember 1928 bis August 1929 arbeitete sie in einer Buchhandlung in New York.

Sie heiratete 1929 den deutschen Architekten Rudolf Hamburger und folgte ihm 1930 nach Shanghai. Dort lernte sie nach viereinhalb Monaten, vermittelt durch die linke amerikanische Journalistin Agnes Smedley, Richard Sorge kennen, der sie für die GRU anwarb und in China Informationen für die Sowjetunion sammeln ließ. Sie hielt Kontakt zu untergetauchten chinesischen Kommunisten, lagerte Waffen, versteckte einen Gesuchten. Als ihr Ehemann von ihren Aktivitäten erfuhr und sie versuchte, auch diesen als Agenten anzuwerben, zerbrach die Ehe. Nach zweijähriger Tätigkeit ging sie 1933 mit Empfehlung Sorges nach Moskau, um das Spionagehandwerk gründlich zu erlernen. Ihren Sohn Michael brachte sie bei ihren Schwiegereltern in der Tschechoslowakei unter.

Ursula Hamburger diente dem militärischen Nachrichtendienst GRU in Asien und Europa. Sie war 1934 in Mukden in der Mandschurei, das Japan seit dem Mukden-Zwischenfall von 1931 besetzt hatte. Ihr dortiger Führungsagent nannte sich Ernst. Mit ihm hatte sie zeitweilig eine Romanze. Als die GRU 1935 die Enttarnung der beiden Agenten befürchtete, beorderte sie Werner, die von Ernst ihre Tochter Janina im April 1936 erwartete, mit ihrem Ehemann nach Polen. Als Deutschland 1939 Danzig besetzte, baute Werner Widerstandsgruppen in der Stadt auf.

Ende 1938, bevor die Wehrmacht Polen angriff, war Werner mit ihrem Ehemann und dem geheimen Sender unter dem Namen Ursula Schulz bereits in die Schweiz geflüchtet. In der Schweiz rekrutierte sie Gruppen für den Einsatz in Deutschland. Von dort funkte sie auch für Sándor Radó. In der Schweiz lernte sie im Februar 1939 die englischen Kommunisten und Spanienkämpfer Len Beurton und Alexander Foote kennen. Foote, der ihr ob seines ruhmreichen Einsatzes im Spanischen Bürgerkrieg von der Moskauer Zentrale empfohlen worden war, setzte sie auf die Messerschmitt-Werke an. Sein Landsmann Len Beurton sollte Kontakt zu den I.G. Farben herstellen.[1]

Für Beurton war es nach seinen Schilderungen Liebe auf den ersten Blick. Sie schilderte es als Pflicht zur Tarnung. Die GRU schickte Werner jedoch zunächst in den Fernen Osten.

1940 wurde Werner von der GRU nach Großbritannien entsandt, um dort ein Netz aufzubauen. In Großbritannien heiratete sie 1940 ihren zweiten Ehemann Len Beurton, erlangte die britische Staatsbürgerschaft und lebte bis 1949 in Großbritannien. 1943 gebar sie in England ihren Sohn Peter. Sie ließ sich in der Umgebung Oxfords nieder, um ab 1943 für die „Atomspione“ Klaus Fuchs und Melita Norwood als Kurier zu arbeiten. Sie beschleunigte dadurch die Entwicklung der sowjetischen Atombombe, die 1949 erstmalig gezündet wurde. Neben Fuchs und Norwood führte sie einen Offizier der Royal Air Force, einen Spezialisten in U-Boot-Radar, und gewann Informationen von ihrem Bruder, ihrem Vater und anderen deutschen Emigranten.

Werner gelang es im Herbst 1944, den amerikanischen Geheimdienst anzuzapfen. Da die Amerikaner deutsche Emigranten als Fallschirmspringer über Deutschland absetzen wollten, sorgte sie dafür, dass unter diesen die Mehrzahl zuverlässige Kommunisten waren, die ihre Informationen aus dem Dritten Reich nicht nur Washington, sondern auch Moskau zur Verfügung stellen sollten.

Bis zum Unternehmen Barbarossa, dem deutschen Angriff auf die Sowjetunion am 22. Juni 1941, ignorierte Stalin die Informationen seiner Nachrichtendienste über den bevorstehenden Einmarsch in die Sowjetunion.

1949 musste Werner wegen der Enttarnung von Klaus Fuchs aus Großbritannien fliehen und ging in die DDR nach Ost-Berlin. 1950 schied Werner auf eigenen Wunsch aus der GRU aus.

„Sie war die vielleicht erfolgreichste Kundschafterin der Sowjetunion im Zweiten Weltkrieg“ [2] und eine der Wenigen, die Stalins Misstrauen, seine Säuberungen und Verhaftungswellen unversehrt überlebte. Sie wurde aber 10 Jahre nach ihrem Ausscheiden aus der GRU aus dem Amt für Information in der DDR entlassen, weil sie eine Panzerschranktür zu schließen vergaß. Nach sechs Jahren im Staatsdienst beschäftigte sie sich als Autorin zunächst überwiegend mit der Publikation von Kinderbüchern. In dieser Zeit nahm sie ihr Pseudonym Ruth Werner an.

1969 ehrte die GRU sie mit einem zweiten Rotbannerorden, dem höchsten Militärorden der Sowjetunion. Bis 1977 entsprach sie ihrer Verschwiegenheitspflicht äußerst diszipliniert. Als sie 1977 ihre Memoiren veröffentlichte, verschwieg sie ihre Kontakte zu Klaus Fuchs, der zu diesem Zeitpunkt noch lebte. In der DDR gelangte sie zu Popularität durch die Veröffentlichung ihrer Autobiographie Sonjas Rapport, die ein Bestseller wurde. Im gleichen Jahr wurde sie in der DDR mit dem Nationalpreis I. Klasse und mit dem Karl-Marx-Orden geehrt.

Im November 1989 betrat die nunmehr 82-Jährige noch einmal die politische Bühne und sprach im Berliner

Lustgarten vor Zehntausenden nach dem Fall der Mauer von ihrem Vertrauen in einen menschlichen Sozialismus. Anfangs setzte sie noch großes Vertrauen in Egon Krenz.

Sie gehörte bis zu ihrem Tode dem „Ältestenrat“ beim Parteivorstand der PDS an.

Bei ihrer Beisetzung im Juli 2000 auf dem Friedhof Berlin Baumschulenweg sprach ein Gesandter der Russischen Föderation als Trauerredner. Ohne dass Werner jemals Uniform getragen hatte, war sie Oberst der Roten Armee. Postum erhielt sie den russischen Orden der Freundschaft.

Werk [Bearbeiten]

Die gepanzerte Doris, Kinderbuchverlag Berlin 1954

Ein ungewöhnliches Mädchen, Verlag Neues Leben, Berlin, 1959

Olga Benario. Die Geschichte eines tapferen Lebens, Verlag Neues Leben, 1961

Über hundert Berge, Verlag Neues Leben, Berlin, 1965

Ein Sommertag, Verlag Neues Leben, Berlin, 1967

In der Klinik, Verlag Neues Leben, Berlin, 1968

Muhme Mele, Neuauflage: Spotless, Berlin, 2000

Kleine Fische – Große Fische, Verlag Neues Leben, Berlin, 1972

Ein sommerwarmer Februar, Kinderbuchverlag 1973

Der Gong des Porzellanhändlers, Verlag Neues Leben, Berlin, 1976

Vaters liebes gutes Bein, Kinderbuchverlag 1977

Gedanken auf dem Fahrrad, Verlag Neues Leben, Berlin 1980

Kurgespräche, Verlag Neues Leben, Berlin 1988

Ein Tropfen Zeit - Gedichte und Texte, Verlag Husum, Cobra, 1990 ISBN 3-923146-28-0

Sonjas Rapport (autobiografisch)- Erste vollständige Ausgabe, Verlag Neues Leben (Eulenspiegel Verlagsgruppe) 2006 (zuerst 1977), ISBN 3-355-01721-3

Filme [Bearbeiten]

Darstellerin

Die Bunte Platte (1934)

Ein Kind ist vom Himmel gefallen (1933)

Achten sie auf Meyer (1933)

Das Dreimäderlhaus (1918)

Biografische Filme

Sabine Mieder: Deckname Sonja - das geheime Leben der Agentin Ruth Werner; Erstsending 7. Februar 2001

Top Secret: Helden und Verräter. Dokumentation, Deutschland 2007, Erstsending 1. Oktober 2009

Literatur [Bearbeiten]

Karin Hartewig, Bernd-Rainer Barth: Ruth Werner. In: Wer war wer in der DDR? 4. Ausgabe. Ch. Links Verlag, Berlin 2006, ISBN 3-86153-364-2, Band 2.

Eberhard Panitz: Treffpunkt Banbury – oder wie die Atombombe zu den Russen kam : Klaus Fuchs, Ruth Werner und der größte Spionagefall der Geschichte, Verlag Das Neue Berlin, 2003, ISBN 3-360-00990-8

Benjamin B. Fischer: "Farewell to Sonia, the Spy Who Haunted Britain" ', International Journal of Intelligence and Counterintelligence 15, No. 1, Frühjahr 2002: S. 61-76.

Rudolf Hempel (Hrsg.): Funksprüche an Sonja. Die Geschichte der Ruth Werner, Verlag Neues Leben, Berlin, 2007, ISBN 978-3-355-01731-2

Auszüge daraus online in: Hermann Kant: Gestern mit Ruth und Len - Erinnerungen an die Kundschafterin und Schriftstellerin Ruth Werner, kominform.at, 15. Mai 2007

Thomas Karny: "Sonja" – Stalins beste Spionin, in: Wienerzeitung vom 12. Mai 2007